

第5回タウンミーティング（農業）会議録

日時：R7.03.01(土)10:30～12:30

場所：前橋市中央公民館 501・502 学習室

参加者：83 人

司会)

皆さんこんにちは。本日は令和6年度第5回まえばしタウンミーティングにお越しいただきまして誠にありがとうございます。私は司会を仰せつかりました、青柳と申します。よろしくお願いします。開会に当たりまして、小川市長からご挨拶よろしく願いいたします。

市長)

皆さん改めまして、こんにちは。今日はまえばしタウンミーティング第5回、農業をテーマに行っていくんですけれども、多くの皆さんにお集まりいただきましてありがとうございます。このタウンミーティングはいろいろなテーマを変えてですね、今年5回開催しているんですけれども、市役所でやってる仕事はたくさんあるんですが、全部を市の職員だけで決めるのではなくて、やっぱり市民の皆さんとざっくばらんに話をしながら、これからの前橋をどうしていったらいいのか、あるいは地域にどういった課題があるのか、それを解決するためにどういう方法があるのかというのをみんなで考えていく場を作りたいということで、今年開催しているものになります。

今日は農業がテーマなので、もしかしたら農家の人しか集まらないんじゃないかな、とか、JAの方しか集まらなかったらどうしようと思ったんですけれども、本当に幅広く学生の皆さんも来ていただいていますし、おそらく消費者の立場で参加をしている方、あるいは今日登

壇してくれる方がですね、生産者の方も、JAの方もいるんですけれども、農福連携という福祉と農業をやってる方だとか、あとは地産地消ですね。前橋の美味しい野菜を、美味しく料理して食べようという活動している方とか、本当に幅広い方々に登壇していただく予定になっています。

この1時間半ですね、皆さんで農業のいろんな可能性を考える楽しい時間にしていただけたらなと思っているので、是非何かあれば、拍手もたくさんしていただいて、大げさにリアクションもしていただいて、みんなで1時間半過ごしたいと思います。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

司会)

続いて、小川市長から「前橋市の農業政策」をテーマにお話をさせていただきます。よろしくお願いします。

市長)

はい、冒頭約10分ぐらいなんですけれども、私の方から前橋の今の農業の現状であったり、市で取り組んでいる政策について少しお話をしたいという風に思います。先ほども言ったようにですね、農業は本当に幅が広くて、前橋はすごく農業のポテンシャルが高いから色々やっていきたいんだというお話をすると、どこに行っても地域の自治会の方も、子供を育てる保護者の方も、あるいは企業・会社の方も、「農業は大事だよね。これからみんなで食べ物のこととか、じゃあそれは誰が作ってるのかとか、一緒に考えていかなきゃダメだよね。」という風に共感をしてくれる方が非常に多いです。

皆さん色々な気になるキーワードがあると思うんですけれども、例えば最近だとですね、お米が高いとか、いよいよ国の備蓄米を放出するという話も出てきていますし、葉物がね、野菜が高いのはどうしてだろうと考えると、ここのところ気候変動で夏が暑く、その影響で冬の野菜もだんだん取れなくなってくるとか、いちごが豊作か不作かというのもそういうのに関わってくるという風に言われていますし、また、いろんな戦争の関係などもありまして、飼料とか肥料とか海外から入ってくるものが高くなると、非常に生産に影響が出てくるとい

うことで、じゃあここをですね、地元で循環型の農業できないかとか、有機栽培をこれからもっとやってかなきゃいけないかとか、そういった話もたくさん出てきているような状況になっています。皆さん気になるキーワードあると思うので、後半の質問の時間に皆さんがこう考えている食料のこととか、農業のこと、自由に質問していただけたらなと思っています。

こういういいことも、ちょっと心配なこともたくさんあるわけですけども、じゃあ前橋の農業って今どういう状況なのかと見てみますと、前橋市は色々な特徴がある中で実は、農業については全国的に見ても強いというような数字になっています。ちょっと具体的に見てみますと、農業産出額は 389 億円、全国で 15 位です。結構大きいです。もちろん、群馬県内ではトップの算出額を誇っています。畜産が強いので、このうち約 7 割は畜産業の売上というふうに言われています。国内トップクラスの農業都市というのが、実は前橋市民にもあまり知られていないので、まずは前橋の人には前橋の農業ってすごいんだよというのを知ってもらいたいし、どんどんそのことも PR していきたいと思っています。

農業産出額、横ばいで推移をしております、何がいっぱい作られているかというと野菜で言えばなすとかきゅうりとか、ネギとかほうれん草とかブロッコリーとかこういったものは非常にたくさんいい野菜が作っていて、主に東京の市場に出荷をしているというような状況になっています。その 7 割を占める畜産については、豚も牛も乳牛ですね。酪農も非常に頑張っているという状況になっています。今日この後、取り組み発表していただきますけれども、すごい酪農家がいるということで、須藤牧場の須藤さん、内閣総理大臣を受賞したことで、日本一の酪農家です。色々私も言いたいんですけど、あとで発表があるので黙ってます。よろしくお願いします。

そして、野菜とお肉、畜産以外にも果物をですね、春夏秋冬いろんな果物が楽しめるということで、前橋に住んでると食べ物困らないですね。これ、今移住してくる方々に前橋の良さって聞かれた時とにかく食べ物に困りませんというのを私は言ってます。当たり前前に皆さんを思ってるかもしれないですけど、新鮮でこんなに美味しいものが安く、いつでも手に入るっていうのは、東京で暮らしてる人からしてみるとびっくりすることだと思います。出張で東京から前橋に来る方、近所のお店でご飯を食べて、野菜サラダなんかを食べるとこんなに美味しいんだっていうので、びっくりする方が多いような状況になっています。

ただし、農家の数は年々減っています。30 年間で半分ぐらいに今減ってしまっていて、高

齡化だとか様々な問題が叫ばれているところになります。農家の年齢ですけれども、今 65 歳以上の割合がまあ 7 割ぐらいですかね。なので、もちろんこう元気に働いていただいている皆さんもこれからですね。頑張って農業を続けてもらいたいですし、若い世代で農業に携わる方をどうやって増やしていけるのかっていうところも色々取り組みを進めていきたいと考えています。

後継者がなかなかいないというのも大きな問題になっておりまして、後継者を確保している農家さんが少ない、なので、自分の子供に継いでもらえれば一番いいかもしれないけど、そうじゃない人たちにも関わってもらおうというようなことも、今後は広げていく必要があると思っています。なので農家が減っているの、耕地面積も大幅に減っているという状況にあります。

一方で、先ほど見ていただいたように産出額は横ばいなんです。農家減っていて、あの耕地面積も減っているんだけど、生産は維持しているということは、今農業をやっているただの方々の努力で規模の拡大化であったり、生産性の向上ということで、数は減っているけれども、1 人 1 人の農家さんには頑張ってもらっていて、産出額を維持している。前橋の農業の今の強みですね。確保していただいているという状況になっています。

で、今日伝えたいことはですね、前橋の農業はすごいということと、でもちょっと課題があるということ。今は強い農業を維持してるけれども、これから先携わる人が減ってしまうと、今の前橋の能力を維持できない可能性もあるよね、ということが課題になっています。で、農家が減って困るのは実は農家の皆さんじゃないと思います。いつも食べている私たち 1 人 1 人が困ってしまうことなので、みんなで前橋の農業のこと、食のこと考えていきたいなという風に考えています。この後ですね、前橋の取り組みについて少し紹介したいと思います。

農業支援の事業、様々なものを行っているんですが、主にですね、今度の令和 7 年度の予算であげているものになるので、まだ確定じゃないんですけども、担い手の支援事業とかセカンドキャリアの支援ですね。新たに退職してから農業始めようっていう方々への支援も拡充をしていきたいと思っていますし、新規の就農者に対する、奨励金であったり、農家さんを応援するための費用というのも少し増やそうという風に思っています。同じようにですね。耕作放棄地を利用する方についての補助金というのもありますし、来年度新しい令和 7

年度は JA 前橋と連携した取り組みというのも新しく進めようと思っております、これは環境配慮型農業ですね。温室効果ガスの低減に向けた新たな事業とか、生分解性のマルチ、こういったものを導入する方に対する補助、飼料用米を作る方に対する支援の拡充、こういったただ単に生産を上げるだけではなくて、環境という視点も入れて、環境と農業のこれからのあり方というところもしっかり見ていきたいと思っています。

さらにですね。今年 1 年取り組んだ「農家応援プロジェクト」というのがありまして。農業はやっぱりいろんなところと関わってくるので、地産地消をどうやって進めたらいいとか、あるいはいろんな人に携わってもらうためにはどうしたらいいか。前橋のいい農産物をブランド化するにはどうしたらいいかということで、幅広く、農政部だけじゃなくて、いろんな分野の方々と連携をして、1 年間研究をさせていただきました。まず、前橋市内の小学校の地産地消率ですね、現在の地産地消率なんですけど、実は前橋産の野菜が使われてる率というのは 28%なんですね。これ多いと思いますか？少ないと思いますか？多いと思う方、手を挙げてもらっていいですか？ありがとうございます。少ないなと思う方、いらっしゃいますか？ありがとうございます。私ももっと使っていきたいなと、50%ぐらいになったらいいなって希望的には思ってるんですけど、今 28.91%でこの数字が群馬県内ではダントツで多いんですね。他の市町村だと 10%とか、20%ぐらいしか使えていないんですけれども、もっともって前橋産の野菜を使える仕組みを考えていきたいなと思っています。

お米とか牛乳とかは前橋産とか県産のものが 100%使われているんですけど、今年取り組んだものの中にですね。まあ、前橋産の有機野菜を 100%使って給食を出してみようということで、これは先日 2 月の 13 日ですね。1 日だけなんですけれども、こういった取り組みもやってみました。どのぐらいの野菜の量が必要かとか、その野菜を、調理場に納入するためにどういう課題があるかというのも研究をして、今後に生かしていきたいなと思っています。あと、今度 3 月にはえっと前橋産の小麦を使ったパンの日というのもやろうと思っていて、これは JA の皆さんに協力していただいて、前橋ロールという前橋産小麦のパンを開発して、それも各学校で 1 食、1 日なんですけれども、提供する予定になっています。ちょっとずつですけれども、そうやって地産地消も進めていきたいと思っています。

あと、市役所マルシェですね。市役所で地産地消の促進を図るというのもやっていて、大体これも月 1 回ぐらいなんですけれども、めちゃくちゃ人気で非常に売れます。定期的にまたやる時は案内するので、ぜひ皆さんなるべく午前中に買いに来てください。あと前橋の PR ということで、JA の皆さんとトップセールスやらせていただいたり、今日お配りしています

けれども、前橋はいちごが美味しいのはもちろんなんですが、家計調査で全国で一番いちごを購入しているのが、前橋だという数字が出ておりまして。実は前橋市民はいちご大好きなんじゃないかということで「いちご推しまえばし」と、今 PR をしているところになります。生産量だとね、他県の強いところには勝てないんですけど、イチゴが好きだという気持ちはどこにも負けない前橋で売っていこうと思っています。色々ガイドを作って今日お配りしているので見ていただきたいと思います。

また、前橋産のブランドですね、農畜産物の加工品も含めた赤城の恵ブランド、こちらもパンフレットをお配りしているので、前橋産の良いものを認証してありますので、ご覧いただきたいという風に思っています。農業については、こういった色々な取り組みしているんですけども、もっともっと盛り上げるためには、これは生産者と、行政と、消費者・市民の皆さんが地元の農業に目を向けること、自分たちの食に目を向けることが大切だと思いますし、そこから環境とか福祉とか地域づくりとか、全てに繋がっていくんだということを意識していただいて、またみんなで盛り上げていきたいと思っています。冒頭の私の説明はこの辺にさせていただきまして、この後ですね、後半の意見交換会で皆さんとざっくばらんにお話をしたいと思いますので、よろしく願いいたします。 ご清聴どうもありがとうございました。

司会)

ありがとうございました。続きまして、農業生産者の方から取り組みの発表をいただきたいと思います。お話をいただきますのは、市内で約 200 頭の牛を飼養されている酪農家の須藤晃さんです。須藤さんは昨年、令和 6 年日本農業賞で大賞、農林水産祭において畜産部門で内閣総理大臣賞を受賞されました。耕畜連携による循環型農業を実践するほか、酒粕、豆腐粕、オリーブ粕など副産物も活用し、持続可能な農業に取り組まれています。 それではよろしくお願いします。

須藤さん)

只今紹介いただきました、前橋市の東部地域の泉沢町というところで、先程 200 頭と言ってたんですけども、大人の牛さんで 120 頭、生まれてから生めるまで牛って 2 年ぐらいかか

るんですけども、分娩する3ヶ月くらいまでは北海道の方で過ごしてもらうように、預託と言われて、北海道の牧場でほしい1年くらいは放牧されて、こちらに帰ってきて分娩という形になるので、総頭数として200頭という形になります。

今日はこの写真の格好ではなくて、普段作業している格好で来ました。これはHPとして牛さんをおもてなしする商売、牛に対してサービスをするというコンセプトで、ホテル須藤牧場という牛のためのホテルということです。そのために衣装を借りてこんな写真を撮りました。

赤城山の裾の尾にあたる大胡町のちょうど下ですね、そこで牛舎がこんな形で3棟に分かれていて、牛を牛群管理といって群に分けて管理をしています。

簡単に自己紹介なんですけども、1970年生まれで、今54歳です。地元の中学校を卒業してから、父親が大嫌いでした。そこから離れたところに行きたいということで北海道に、中学を卒業してから行っちゃいました。で、酪農のエリートコースですね、高校、大学と行って帰ってきて、酪農家さんがお休みを取るということで、その代わりにヘルパーに自分たちが入って、酪農家さんに休んでもらうという、そういう職業です。

現在かなり人手不足で酪農家さんもなかなか休めないということで、人手を増やして酪農家さんの代わりに入って休日を作ってあげるということを、この業界では色々取り組んでいるんですけども、なかなかどの業界も人手が少なくなっているんで、酪農家さんも全国で1万軒を割っちゃったというところで、自分が入った時は群馬県だけでも500軒とかあったんですけど、今は300軒を割っていると。自分が担当していた180軒くらいあった組合ですが、今は50軒を割っている勢いです。そのくらい酪農というのはどんどん減っていています。

で、平成13年に2代目として父親の跡を継いで就農したという経緯です。酪農のお仕事ってどんなことをするのかというのを説明していきたいんですけど、ほしい牛乳搾ってるといって感じと言われるんです。あとは牛肉、そういうのを作ってるんじゃないと言われるんですけども、答えは「生乳」ですね。生の乳で、牧場でそこにあるものっていうのは生乳なので、来てもらって飲ませてください。というのは本当はやってはいけない行為です。

なので「牛乳」かと言われると牧場にタンクローリーが汲みに来ていただいて、組合に一元集荷。まず集めて、そこからメーカーさんに行って殺菌をする。殺菌の工程を終えたものを「牛乳」という話になるので、だから牧場で生産してるのは生乳ということになります。で、牛乳は色々なものになって生クリーム、生クリームを振ってバターになったり、乳酸菌を入れてヨーグルトになったり、乳酸発酵させてそこにカゼインっていう酵素を加えてで、そこにレンネとか、酵素を加えてチーズになったり、色々な物になっております。なので一応牧場が最初に生乳を生産してるところから始まるということで、皆さんよく覚えていただきたいと思います。

で、牧場の仕事です。朝晩基本的に酪農家の人は 12 時間感覚で牛のお乳を搾る。これがメインの仕事になります。で餌をくれます。牛舎、ベッドの掃除だったり、糞を外に掻き出して、ベッドメイクもします。こんな形で見えていくと、だんだんホテルっぽくなっていく感じなんですけど。赤ちゃんが生まれますので、赤ちゃんにも哺乳という形でミルクをやります。24 時間体制でいつあるかわからない分娩にも対応しますんで、ここには感知カメラが 4 台 5 台ついていて、スタッフのみんながアパートに帰ったり、自宅に帰ったりしてもいつでも見えるように、いつでも飛んでこれるようという形で、基本的には自然分娩、去年 11 月から 2 月いっぱいになるんですけども、基本的にはすべて 100% 自然分娩で全ての仔牛たちが生を受けてここで男の子が生まれますと、牛肉という形で国産牛というホルスタインの肉と、ホルスタインに和牛の種をかけると F1 といって交雑種という形で今ヘルシー思考が高まってまして、国産和牛とホルスタインに和牛をかけて交雑種の F1、そちらの方がちょっとヘルシーなんですね。なのでそちらの方が消費が伸びてるということで、だんだんだんだん和牛よりもヘルシー思考になってるという傾向もあります。

日中は何をしているかというと、堆肥を畑に入れて耕作したり、夏になると背の高いとうもろこしがあるのを見たことあると思うんですけど、それを白い、大きいラップと言われてる、ロール状のものにして、人間でいうと漬物状態にして、1 年間保存をするという、そういうものを調整作業で刈り取ったり、ロールにしたりして、あとは畔の草刈りですね、そんなことをしております。

牧場の取り組みとしては先程の、牛のホテルと言った形で牛へおもてなしをしていると。または先ほどから前橋市でも取り組んでいる、耕畜連携ということで国産飼料を作っております。そこでは元気ファーム 20 さんだったり、山田農園さんたちと一緒に取り組んでおります。教育機関の連携もしてまして、中学、高校、大学、専門学校、特別支援学校、また、

里山の学校、児童養護施設などと一緒に色々なことをやっております。また、企業さん団体さんとことで IoT、色々なことで一緒にやっております。で、あとはモッツァレラチーズですね。これも後ほど説明をいたします。

後継者不足ってことで、うちもそこをなんとか、後継者と言われてもうちは3人娘なので、娘はもう全員東京に行っちゃいまして、うちを継ぐ気配は全然無いので、今のスタッフに継がせる、第三者承継というのを考えて、およそ10年後ぐらいには彼らに渡すような算段をしております。

牛のホテルがコンセプトということで、牧場の入口にはヤシの木が生えていたり、「COWS HOTEL」という看板を設置したり、ちょっと雰囲気をホテルっぽく寄せています。

元気ファーム20さんだったり、山田農園さんと取り組んでいますのが、田んぼで飼料用の稲、飼料用の麦、前橋市は2毛作地帯なんですよ。なのでお米を取れる時には飼料稲を茎から全体を全て刈り取って乳酸菌を添加して漬物状態にして1年間給与できるようにしております。これから春にかけて今伸びている麦、あとはそのお米だけですね。お米も乳酸発酵させて全部これ保存飼料で丸1年給与できるように保存状態で、このラップフィルムというものに丸めて保管して、牛の餌を通年給与、毎日同じ餌が食べられるようにそんな形を取っております。

あとは、教育機関との連携ということで、中学校から職場体験を受け入れてまして、それから出前授業だったり、あとは高校ですね。勢多農の高校生が1年に1回来て、牧場からこう課題提供をして、夏休み期間中に生徒が一生懸命考えて、また夏休み明けに牧場に来て、その課題について一組一組発表するみたいな、そんな活動もしてます。あとは地元の農林大学校から実習生を受け入れて、現場の実習約1か月間そんな形もやって、あとは全国から高校だったり、あとは専門学校だったり、大学生を受け入れたりします。

今日この後小淵さんから話があると思いますけども、農福連携という形で、うちも特別支援学校と連携をしまして、彼を大体3年間かけて実習をしまして、そんな中でうちで雇用する形で今も4年目になって無遅刻無欠席で彼も働いております。また、特別支援学校からは何名か動物が好きだっていう方、そういう人たちを受け入れて、その子がこういうところで通

用するのかっていうのを正確に判断をしながら、先生と次の職場に繋げるような活動もしております。

前橋でも取り組んでおります、スマート農業といった形で、全国でも2番目、北海道に次いで本市では一番最初に牛にセンサーを着けた牧場になりまして、オレンジ・青・緑のちょっと色は分かりづらいですけど、牛が寝てたり、あとは食べた後、反芻をしてる時間だったり。あとは歩いてる時間、寝てる時間ってのを3つのグラフに表してるんですけど、人間と同じで具合が悪ければ当然ご飯は食べずに寝てる時間が長くなる。長くなったらその子は病気かもしれないっていうこう携帯にお知らせが来る。そういうシステムになってまして、あとは右側のように発情ですね。牧場にはメスしかいないんですけど、でも牛さんというのはオスを求めて鳴いたり、歩き回ったりするんで歩数が増えるので、そうするとグラフみたいに伸びるので、それが歩き回ってるのが多いと、通知が来ていっぱい歩いてるというので発情かもしれません。という通知が来るのがスマートデバイスになります。牛の首についてるのがそうですね。あれは加速度センサーになってて、牛の動きを常に監視状態にしてるので、それが増えたりした時に携帯に通知が来るようになってます。

あとはその他県内企業、このような形で色々な副産物を利用しております。説明にもありましたが、搾りかすとか緑茶の粕だったり、豆腐粕、あとは酒粕ですね、今聖酒造さんの酒粕を使っていて、自分も酒粕毎日食べて美味しいなって思ってるぐらい、聖酒造さんのお酒は美味しいです。あとは運搬ですね。そういうものも各企業さんと運んでもらえるような提携を結びまして、色々な副産物が使えないかなということを色々試したりしております。

やっぱりいろんな餌にこだわってせっかく前橋産の餌で育ててますんで、なんか特別なことにしたいということで、モッツァレラチーズを製造を始めて、左から白・黒・赤っていうモッツァレラになってるんですけど、普通にプレーンタイプと真ん中が醤油漬け、右側は赤城フーズさんのカリカリ梅の梅ジェンヌっていう。それとコラボをしたモッツァレラの梅ジェンヌ味っていう形で色々販売をさせていただいております。これからその説明になるんですけども、じゃあどこで食べれるのかってことで今 PIZZERIA PESCA さん、前橋の駅にあったんですけど、今度中央アーケードのところに店を3月にオープンさせる、またそこで食べられますんで、ぜひキングオブピザでトップを取ったピザも食べられますんで、是非。というのとは初日総本店、お寿司屋さんですね。お寿司屋さんでもこの右の漬け握りと言いまして、先ほどの醤油漬けを炙ったお寿司として食べれるので非常に絶品ですので、ぜひ一度ご賞味ください。で、赤城フーズさんとコラボした梅ジェンヌは真っ赤で開けると紅白のよ

うになって、祝い事にちょうどいいかなと。ちょっと試してみてるところです。今後販売していくつもりなので是非。

やっぱり 100 年続く酪農ということを、地域に牧場が常になくてはいけないってことで、今の生き抜くのはなんとかできたとしてもやっぱり次に続けなきゃいけないので、今ここに写っている右側の農場長、彼が今 4 年目 5 年目で今あの農場長を勤めていて、左側が去年の 4 月に入った子になりますけども、この 2 人に第三者承継をする形で、教育、または彼らにも仕事を任せつつあります。

その他、農場 HACCP と言って、やっぱり牛乳は安全じゃないといけないというのを見える化していく、あとは酪農教育ファームと言って、生徒さん達や色々な消費者さんを受け入れられる体制を取って牧場で学習ができる、そういう形の酪農教育ファームという認証も取ってたり、あとは今日、青柳さんもいらっしゃいますけども、毎年 1 回、11 月に牛乳のイベントがあったり、そういう形もしておりますので、ぜひ見かけたら声をかけてください。

また、倉渕にある里山の学校さんにも牛を寄付させていただいて、そこでやっぱり学校の行けないというこどもたちでも、動物を育てることによって、現場の生の情報を常にわかるというか、そういう形なので、牛を一頭プレゼントさせていただいて、色々なイベントと一緒に活動してたりしております。

今後の牧場の役割としては、飼料生産で前橋の田畑を守っていく、これはもう牧場の役割じゃないかと、これはもう地域の農家さんと一緒に手を合わせながら、そこに牧場があることによって堆肥だったり、肥料の軽減だったりという形をどんどん作っていければなと思っています。また国内資源の、人間がもう食べない・いらないよというフードロスのなものをうまく牛に食べさせてミルクを作って、そこからチーズを作っていくという形で、なんとか皆さんの口に入るまで、副産物なんかを利用してやっていきたいなと思います。

また、牛を通して先ほどの生徒さんだったり、今は児童養護施設の生徒さんたちがこないだうちの牧場に来ていただいたんですけども、やっぱりちっちゃい小学生から高校生までたくさんいる中で、牛と触れ合って餌を給与してみたり、牛と見つめあったりしてるだけで心が動いてる感じを見ていると、やっぱり牧場って必要な、と思ったので、命とか食を牧場

の役割として伝えていきたいなと思います。また、地域全体で循環する農業の形を前橋の中でうまく作れていけばいいなと思っております。以上で、ホテル須藤牧場と検索していただければいろいろなことが見れますので、ぜひよろしく願いします。ご清聴ありがとうございました。

司会)

須藤さん、発表ありがとうございました。それでは次に本日ご参加のみなさんと小川市長との意見交換に移ります。この意見交換では市長の他に農業生産者と消費者の立場から4名の方にご登壇頂きます。それぞれの視点からお話を頂戴したいと思います。

始めに登壇者をご紹介します。お名前を呼ばれましたら、お一人ずつその場に起立をいたしましてご来場の皆さんに向かってご挨拶をお願いいたします。

お一人目は、社会福祉法人ゆずりは会理事の小淵久徳さんです。

お二人目は、JA 前橋市代表理事組合長の矢端幹男さんです。

三人目は、地域おこし協力隊の村上史さんです。

また活動紹介に引き続き、須藤晃さん、小川市長にもご登壇いただきます。

それでは、意見交換に入る前に、小淵さん、矢端さん、村上さんの三人から自己紹介を兼ねて、ご自身の取り組みなどをご紹介しますと思います。まず最初に小淵さん、よろしく願いします。

小淵さん)

はい、それでは改めまして、皆様こんにちは。ご紹介いただきました私、社会福祉法人ゆずりは会という法人の理事をしております、小淵久徳と申します。本日はよろしくお願いいたします。先ほども須藤さんの話にありましたが、農福連携というキーワードが出てまいりました。今日は是非会場にいる皆さんにこの言葉をですね、覚えて帰っていただきたいという風に思っております。

自己紹介を兼ねてということですので、ゆずりは会のことなども含めてご紹介をしたいと思います。私の所属するゆずりは会はですね、障がいがある方達を、働くということで支援をしている法人になります。今年で法人設立、ちょうど20周年になる法人になります。前橋市内にはゆずりは会のゆずりはという施設と、私が所属する菜の花という2つの事業所のございまして、40数名の障がいのある方達が毎日仕事をするために通ってきております。その中でですね。障害福祉の分野で言いますと、どんな仕事をするかは事業所ごとに色々な仕事を選んでしていますけども、我々のゆずりは会はですね。非常に農業に特化した活動を推進しております。売上のうちのおそらく90%以上は農業に関連する仕事で、毎日の障がいのある方達の仕事を作り出しているという形です。

後ろに写真も出ておりますが、こんな形でみんなで楽しく農業をやっております。楽しくという形ではありますが、障害のある方達の課題としまして、働く場がなかなか生み出せていないという課題と、その中でもなかなかこう、賃金と言いますか、お金を高く手にすることができないという課題がある中で、我々の障害福祉の分野でですね、働く場の提供と少しでも障がいのある皆さんに多くのお金を渡せるようにという取り組みが我々の使命ということになっている中でですね、ゆずりは会は農業に取り組むようになって少しずつ、皆さんにお渡しするお金などが高くできるようになってきております。群馬県に200ぐらい、我々と同じ制度で事業運営をしてる障がい者施設がありますが、その中でもゆずりは会は群馬県で1番2番という賃金の支払いを、工賃と言いますが、その支払いをさせていただいております。

今、お野菜とかお米だとかを栽培して、出荷しております。こんなこと言うと怒られるかもしれませんが、弁護士さんとか例えば建築士さんとかって一生に一度しかお付き合いしないかもしれませんが、農業って毎日皆さんお世話になってると思うんです。1日3回お世話になる仕事だと思います。須藤さんの話にもありましたが、非常にこう重要なあの役割を担ってる職業、もちろんその他の職業の皆さんがそうではないという訳ではなくてですね、本当に身近なところにある職業の中にですね、我々は障がいがある方達と共に、それを築き上

げていきたいという思いで、この農福連携というものを推進しております。

現在ですね、国でも施策として農福連携というのを推進していただいております、令和6年7月に食糧農業農村基本法ということで、農業基本法と一般的には言いますが、この中にも農福連携について触れていただいております、この改正ポイントというような中にはですね。実は我々の法人の取り組みが事例としてあげていただいております。その他、農業白書ということで、白書というのなかなか難しいんですが、これも食料農業農村白書ということなんですが、こちらにもですね。全国3事例の農福連携の事例を取り上げていただいている方に、我々ゆずりは会の取り組みを掲載していただいております。全国的に農福連携という取り組みが広がってきてはいるんですけども、本当に良い取り組みはどんどん増やしていこう、広げていこう、障がいのある方達だけではなくてですね、今働きづらさとか社会での生きづらさを抱えてる人たちの活躍の場を、農業の分野に広げていこうというところが非常に大きな注目される点になってきています。

農福連携という形で頑張ってきていてですね、イメージ動画と言いますか、農福連携を全国へ推進するための動画を作っていただいたので、皆さんにご覧いただきたいと思います。

(1分ほど動画鑑賞)

はい、今出てきたのはみんな我々の事業所に働きに来てるメンバーの皆さんなんですけど、こんな形で地域の中にですね。地域の中で農業という形で働いてですね。活躍して地域の一員に皆さんがなっているという姿が現在広がりつつありますし、これからも広がっていただきたいということで、皆さんにもぜひ知っていただきたいと思います。ありがとうございました。

司会)

小淵さん、ありがとうございました。次に矢端さん、よろしくお願いします。

矢端さん)

よろしくお願いします。JA 前橋の矢端と申します。一つの顔が JA の代表ということ、もう 1 つは矢端ファームという農業の会社を経営しているものであります。一つだけ、農協のことはまた後にしまして、自分の会社の PR なり、こんなことやってるというのを 2〜3 分で話したいと思いますけども、前橋の、今は新しい日赤と言ってもらおうと大体の人がわかってもらえるかなと思ってますが、日赤の周りですね。約 40 ヘクタールぐらいの土地をほとんど借りて米麦を中心に、今日は全員会わないでこっちに来ちゃったんですけど、ネギを収穫をして出荷をするという作業と、1 人アルバイトが来て冬場に餅をついて売ってるものですから、餅を直売所に運ぶというようなことを今やっております。そのようなことをやりながら、正社員が 4 人、それから僕と女房がいるというような感じで、前橋の南部地区で 40 ヘクタールぐらいを経営をしながら、農協の組合長もやってるというような 2 足のわらじを履いてます。土日は会社の仕事で月曜日から金曜日までは農協ということでやります。

この農協でありますけども、農協って何だっっていうのも少し時間をいただいてですね、戦前にもありましたけども、戦後、第二次世界大戦が終わりまして、GHQ が来て、ちょっとした社会の勉強みたいになりますけども、誰が戦争しかけたんだということで、この軍の閥と財閥、それから何だか分かりませんが、そこに農業の地主というのが、これもこの 3 つがああ悪いことしたんだっっていうことで、事務所を解体をするということで、まあよく言われる農地開放というのをやりました。

では、その中で小作人たちのがみんな今まで耕してた小作地がその人たちのものになるということになって、大体平均で 1 ヘクタールぐらいの土地を経営するということが始まるわけです。1 ヘクタールぐらいですから、今僕が 40 ヘクタールと言いましたけども、1 ヘクタールの土地で米を作ったり、麦を作ったり、野菜を作ったりということになりますと、要は小規模の農家の集まりが全国に出来上がったということになります。力のない農家で特にその頃はですね、今もそう言われてもしょうがないですけども、あんまりお金がない。米を作るのに 4 月・5 月から種の準備をして田植えをして秋に収穫をするわけですけども、収穫をして、例えば米をどこかに売るといような作業をする中で、売ってお金に変えるとなるともう暮れになるわけですよ。で、そこまでに農家の人たちはお金が尽きてしまいます。

食管法って食料の食管法というのがありまして、そこで国が買い上げるという制度を昭和の、全然勉強不足でいつまでやったかなんて覚えてませんけども、50 年代ぐらいまではやり

ましたよね。で、秋にね、9月頃になるとお金が国から、1兆5000ぐらいでしたかね、もらえるという制度で、何でかというのですね。それだけ農家が貧乏だったということですね。

貧乏な人たちが集まって小さな小さな農家の人たちが集まって、1つの組織を作って1年かけていくらかのものがお金を貯まったのをどっかの銀行にやるんじゃなくて、自分たちの組織がお金を貯めて、そのお金を農家の人たちが機械を買いたいとか、何かを買いたい、それから子供たちを大学じゃなくて高校に行かせたいとかそういうところで金融というのができるようになります。今でいう銀行みたいな、銀行と言っても金融ですかね、それから米ができなかったり、自分たちが病気になったりして、また生活に困るようなことになると、そこで保険業もやりましょう、というようなことをして、そして最後には米の作り方、こういう作り方をした方がいいよ。キャベツの種はこういうのがいいよ。っていう農業指導も1つの大きな柱として農協が担うわけでありまして。

そして、どこかに売る、市場に売る、それからスーパーに売る。そういうことをし、肥料を皆で、共同で購入して、少しでも安い肥料を買う、農薬を買うという組織を作り上げてきた訳であります。それが今の農協であります。それを「JR」だとか、「JT」というような20数年前にリメイク、企業のイメージを良いようにと思って、「JA」ということになりました。昔の言葉で言えば「農協」というのが組織されて、今まで来たわけであります。今は貯めたお金を農業者に貸すという前提もありますけれども、先程市長さんのお話にもありましたように、農業者が減っておりますので貸しきらないで違うところに預けたり、色々なことをしながら、農協というものを経営してるわけであります。

簡単に話をしますと、約20年前、前橋農協は皆さんから預かったお金が2500億円ぐらいありました。今も2500億円ぐらいあるんです。20年前から全国のお金が全然増えてなかったのかなという、そうではないですよ。下手すると倍ぐらいになってるはずですよ。なのにも関わらず、農協には2500億円しかまだ預かってる金額がありません。何かというとやっぱり農業者が減り、農業というものに携わる人たちがだんだん減ってきますと、やっぱり農協じゃなくて何々銀行だとか、信用組合の方に行ってしまうのかな、そういうことからして農業者が減ってきているのが、今の全体的な状況かなと思ってます。

生産量っていうのは、須藤さんの話でも出てきたかもしれませんが、牛乳という中で見ればそれほどの減りはないです。これが須藤さんのような大規模化をする人たちが集約を

してくれている。矢端ファームもそこに少し加わってるのかなと思いますけども、僕の、後閑町というところに水田が 80 ヘクタールぐらいあるんですけども、そのうちの約半分を僕のところの 5・6 人で管理をするという効率の良さとでも言うんでしょうか。経営がうまくやってる人たちがだんだんこう勉強をしながら規模の拡大をしているというのが今の状況かなと思ってます。ただ、それがどこまでちゃんと続くのか、不安なところがすごくあるので心配をしてるところであります。

農協の仕事、そんな話をし、農家とはこのようなというのがありますけども、今映っております、市長さんに来てもらって、東京の市場にトップセールスということで挨拶をしていただいたり、サンプルのきゅうりなどを配ったりするということをしています。これってどこの市もやってたりするんで、それほど面白みはないかもしれませんが、先ほどの脱プラスチック宣言は、これがある新聞の記者に言わせると、全国で初めてだと思いますよって言われたのが、行政と農協で一緒に脱プラスチック宣伝をしようっていうのは多分初めてであるかと思います。

このきっかけはですね、僕が何年か前に田植えをした頃だったと思いますけども、近所の人がですね、「なんか変なものが田んぼに浮いてるよ」と、もう水を入れて田植えが終わった頃だったと思いますけども、なんだと思って行くと白い小さな物が、これが肥料を固めていたプラスチック製のものだったんですね。うちの田んぼを見て、何だろうと思って、それこそその時は肥料をどういう風に作ってたなんて、あんまり気にしてなかったんですけど、農協を通して肥料会社に問い合わせをしたところ、プラスチックで肥料を 1 つ 1 つ粒にしてるんですよ、これが一番効率いいんですよと言われてまして、粒にして固めておかないと、1 つの袋が全部固まっちゃうということもあるんで、そうだなと。だけど農業をやってて、これがまた利根川に流れて太平洋に行って、太平洋でウミガメがそういうものを食っちゃうんだよと。ウミガメだけではなくて、魚たちがみんなそういうもの食べたり、いろんな悪いことをするんだよというのが今、テレビでもよく報道されています。格好良くないなと、農業やってるとするのは一番自然の相手で、良いことのはずなのに、一番悪いことをしているのかなと思って、何年か燻ってたんですね。

それからたまたま農協の組合長になるということもあったものですから、これを機に前橋市農協だけでも脱プラスチック宣言をして、すぐ何も使わないぞとはいきませんが、使いたくない宣言なんですけど、それが出来るといいなと思って考えてたんですが、たまたま市長さん、農政部長さんと話をして考えてみると、これは市と一緒にやった方が効果があるな

と思って、一緒にやりましょうということでこういうことになりました。そんなことも農協はやるようにしています。

また何かありましたら、今日一緒に、「農」というのはあんまり考えない人が多いかもしれませんが、「食」というのは考えてくれておりますね。その先に「農」があることを知っていただければいいなと思って。こんなに皆さんがですね、参加していただけると思ってもいなかったの、喜んでいるところであります。今日はよろしくお願いいたします。

司会)

矢端さん、ありがとうございました。続きまして、村上さん、よろしくお願いします。

村上さん)

前橋市の地域おこし協力隊の村上史です。地域おこし協力隊になる前は、フリーランスでお店を持たない料理人として活動をしておりました。具体的には、イベントの際に料理を提供したりとか、農家さんからの依頼で農産物を使ったレシピの考案、そういったことをしておりました。なぜお店を持たないかと言いますと、何かを食べる時にいつどこで誰と食べるかとか、どんな気持ちで食べるかとか、そういったことをすごく大切にしたいと思っているので、お店を持たないというスタイルでやっておりました。例えば、「あの時にみんなで食べたあれがすごく美味しかったな」とか、そういったことを思い出した時に大切な記憶になったりということは皆さんきっと経験があると思うんですけども、そういったような料理を作れたらいいな、という思いからそういう活動をしてました。

現在ですね、地域おこしやってるんですけども、前フリーランスで活動していた中で、人との出会いであったりとか、あとは繋がり、その大切さというのをすごく実感するようになりました。自分1人で料理をするのではなく、例えば生産者さんがいて、それを食べてくれる人がいて、その思いというのを繋げていくことにやりがいを感じています。ですが、そういう活動をするには、例えば新しく何かをしようとか、現状を変えようとか、そういうことで必要になってくることも出てくると思います。関わる人というのがもちろんいろんな人たち、いろんな特技を持つ人たちというのがいらっしゃるので、そういった人たちをつない

で参加をしてもらうことで、前橋に住んでいる人全てが暮らしとか、生活そのものというのを楽しんでもらって、そういったことに積極的に参加をしてもらえるようにという風に思っていて、地域おこし協力隊として現在活動しております。

活動のミッションとして、スローシティの認知拡大というのと、推進というのがあるんですけどこれは元々、地域の食文化を見直す「スローフード運動」というところから派生しています。スローシティはその考えを生活全般に広げた考え方なんですけれども、私自身も得意分野である、食に関することというのをメインにやっています。例えば今はですね、前橋リビングラボの主催でやっている「惣菜マダム」という活動があるんですけども、そこで地元の食材を使ったお弁当作りっていうのをやっています。これはもともとですね、料理好きのマダムが家族のために丹精を込めて作る料理を、街の皆さんにお裾分けをするというコンセプトで始まったものなんですけれども、最終的にはお惣菜屋さんの開業を目指しているというそういう団体になります。

前橋もですね、肉とか野菜というのがとても美味しくて、他県にもすごく誇れるという風に思っているんですけども、実際住んでる人にとっては小さい頃から当たり前に食べているので、あって当たり前のものという認識がすごく強いと思っています。生産者さんとしてもいいものを作っただけではいても、その良さっていうのを効果的に PR する術というのが少ないという話もよく聞きます。そこで、生産者さんの方に直接話を聞いて、食材の勉強をする機会というのを設けて、その食材を使ったお弁当を販売するという活動を行っています。

今、写真にあるのが惣菜マダムの活動で、生産者さんにお話を聞くというセミナーをこんな感じで、今写っているのが角田養鶏場さんのたまごのお話なんですけど、御本人にお話を聞くと同時に、実際にお話だけではなかなか魅力が伝わりづらいと思うので、惣菜マダムのメンバーがですね、その卵を使って色々試食を作って、持ち寄って皆さんにも食べてもらおうとそういった機会になります。

こちらはですね、冬の勉強会の様子なんですけれども、前橋の特産というか、もう前からずっとある伝統野菜と言いますか、石倉ネギというのがありまして、こちらは石倉ネギのセミナーですね。実際に販売したお弁当が去年の夏から始まったんですけども、夏のお弁当がこういった感じですね。この時は、はなぶさ有機農園さんのブルーベリーと良農園さんの夏野菜を使ったメニューで、こちらが秋のメニューなんですけれども、角田さんのたまごが

入ってます。 こういったものを作っています。

他にはですね、あの、前橋市民にとっての新しい家庭の味を作るという取り組みもやっています。ソースカツ丼とか、焼きまんじゅうとか外食におけるソウルフードというのはすごく有名だと思うんですけども、じゃあ、実際に家庭でよく食べるものとか、思い出の味とかはどういうものがありますか？という話を聞くと、皆さん昔はよくうどんを食べられたとかそういう話は聞いたんですけども、今は現在特にないというような回答が返ってきました、なかなかそういうのが家庭ではないということで、こんなにいい食材、美味しいものというのがたくさんあるのに、その良さに気づいていないという現状がすごくもったいないなという風に思ったことがきっかけでした。

そんな中で前橋市の清里地区というところがあるんですけども、そこで根付いている清里焼きというものがあるという風に知りまして、それをヒントにそれぞれの地域でアレンジができる前橋焼きというものを考案しました。今写ってるものですね、これが去年の夏に清里で夏祭りがあるんですけども、その清里焼きの隣で焼かせてもらった様子ですね。現物がこんな感じのものなんですけれども、味噌味のお好み焼きに近いものです。これを清里焼きをヒントに、それぞれの地域で例えば粕川だったら納豆があるよ、とか田口だったら田口菜があるよ、とかそういう各地域でアレンジができるものとして、そのベースを作ったということです。こういったことを取り組みとしてはやってはいるんですけども、それが文化として根付いていくというのにはすごく時間がかかることだと思っています。なので、少しずつでも細く長く続けていくことが大事ななと思っています。

他には旬の食材を使ったレシピを、道の駅まえばし赤城の観光案内所内で掲示をしたりとか、それと同じものを前橋市の公式のクックパッドなんですけれども、そちらに掲載をしてもらったりといったことを行っています。自分の作ったものを食べてもらえるっていうのはすごくありがたいですし、美味しいという風に喜んでもらえるのは、それもすごくやりがいがあるんですけども、1人で完結するということではなくて、たくさんの人と関わっていくことで自分の知識とか、経験とか技術とかそういうのを活かして人が繋がることのすごさ、素晴らしさとか、自分自身のやりがいとか、そういったことを実感しています。

スローシティの考え方にも通じるんですけども、型に当て嵌めたやり方ではなくて、どうすればいまある良さっていうのを生かして、後々受け継いでいけるかっていうことを大切

に活動の場を広げていきたいと思っています。以上です、ご清聴ありがとうございました。

司会)

皆様、自己紹介などありがとうございます。

それではこの後、5 人の方にご登壇いただきまして、意見交換に移らせていただきます。
会場の準備を致しますのでしばらくお待ち下さいませ。

準備が整いましたのでこの後、意見交換に移らせていただきたいと思います。意見交換における留意点、4 点お伝えさせていただきます。みなさん、是非ご協力お願いしたいと思います。皆さん、色んな考えがあって意見読みたいなと思うと思うんですけども、たくさんの方がいらっしゃるって時間が限られておりますので、質問とさせていただきます。質問時間は 2 分目安でお願いをしたいんですけども、今日、たまごのタイマーを持ってきました。これ音がなります。これが鳴ると 2 分になりますので、ぴよぴよ鳴ったら 2 分だなと思っていただけだと思います。2 分目安で、2 分まで喋ってくださいことじゃないですよ。短くてもいいんですけど、2 分経つとぴよぴよ鳴ります。

それから、質問してくれた方、こんなたくさんの中でお話しするのは緊張しますよね。なので、質問して下さった方には皆さんで拍手をしてください。意見は違って当たり前だと思います。全員同じ考えの方がいないと思うので、自分と違って否定はせず、ぜひ質問して下さった方に拍手をお願いしたいと思います。そして限られた時間のため、質問は今回のテーマ、「農業に関すること」こちらの内容でお願いができればと思います。で、この 4 点を守って、ご質問いただきますようお願い申し上げます。

全ての方からご注文を受けることができない可能性も時間上ありますので、あらかじめご了承ください。ご質問、挙手をお願いしたいと思いますが、指名された方はご発言の前にお住まいの町名、それからお名前をお願いしたいと思います。皆さんから意見をいただく前にですね、市長の方から皆さんに聞きたいこととかありますか？

市長)

そうですね。でも大分皆さんしっかり喋っていただいたので、聞きたいことが会場の皆さんたくさんあると思うので、どなたに聞いてもらってもいいですし、サクサク進めたいなと思うんですけど、1点だけさっき村上さんの発表の中にスローシティという言葉が出てきたんです。実はスローシティというのも、食とか地域の文化、前橋の良さを伝えていくためのとっても大事なキーワードだと思うんですけど、スローシティ、聞いたことある方どのくらいいらっしゃるでしょうか？結構多いですね、ここの会場。嬉しい、ありがとうございます。初めて聞いたよ、という方。この方がいつも多いんです。ありがとうございます。

スローシティも地域の職だとか伝統だとか、自然を大事にしながら豊かな生活をしているというところに価値を見いだす、国際的な取り組みなんですけど、日本の中でこのスローシティ連盟に加盟しているのが、現状では前橋市の赤城の南面の地域と気仙沼市2つしかないということで、すごいと思うでしょう、2つとなると。そうなんです。前橋の良さがやっぱりもっと住んでいる私たちも知らなきゃいけないし自分たちが知ること、外に対しても伝えていけるので、ぜひスローシティというのも今日覚えてもらえたらいいなと思いました。ということで、この後はサクサク質問いっぱい受けたいと思います。

司会)

市長に対しての質問でもいいですし、せっかくご登壇いただいているので、4名の登壇者にもぜひ、質問の方よろしくお願ひしたいと思います。それでは質問のある方、挙手をお願いします。

参加者1) **有機農業の今後の取り組みについて**

よろしくお願いします。今日は大変、素晴らしい話を頂きまして、特に矢端さんが仰った脱プラスチック宣言、すごくいいなと思いました。

私はかねてから農薬の健康に対する影響というのを心配しておりまして、最近 AI は非常

に進歩が早いので AI にこういう質問をしました。「農薬は神経発達に影響しますか？」そうしたら、AI は「はい、農薬は神経発達に影響を与える可能性があります、特にこどもの神経発達に悪影響を及ぼすことが指摘されています。神経伝達物質の働きを攪乱し、IQ の低下や学習能力の低下に影響を及ぼすことが報告されています。」で、これは私が使ってる AI で、他にも例えば、chatGPT に聞いても同じような答えが返ってきます。

非常に心配なことなので、特に小川市長は有機農業を促進するという非常に素晴らしい感覚を持っていらっしゃると思いますので、ぜひ、小川市長にどのようにして有機農業を進めるかということをお聞きしたいと思います。

市長)

ありがとうございます。今有機の話もありましたけれども、JA の皆さんとも脱プラスチック宣言とか脱メタン宣言もさせていただいて、脱プラ、脱メタンだけじゃなくて、環境負荷の少ない農業というので、たくさん野菜を作っているみなさんもだんだん農薬を減らしてなるべく自然にいいものを、ということをやっているんですね。

なので農薬が全て悪いとか、それを使っちゃいけないということではないんですけど、だんだん日本全体が農薬を使わないようになってきている、なるべく自然にも人にも優しい農業に進んできているよというのが1つと、先ほど言ったように、いろんな世界情勢もあって、なかなか肥料とか科学肥料が入らないというようなこともありますので、だんだんそういう意味では、地元の地産地消ができるような、そういった循環型の農業をこれから取り組んでいくという上では、有機栽培もどんどん増えていくだろうということで、前橋でもそういった有機をやりたい方も後押しをしていこうという風に考えています。

これはですね、どれが正解とかこうじゃなきゃいけないということではなくて、やっぱりたくさんの、私たちの食料を作るためには生産性を上げて大量に食料を作るという役割も必要ですし、一方でこだわって有機のものを作りたいとか、オーガニックに取り組みたいという方が取り組める環境も必要だと思うので、両方しっかり連携しながら進めていけたらなと思っています。

この前、給食で初めて有機野菜の日というのも作ったんですけども、これも子供たちが食べる野菜を、全部有機の食材が今用意できるかというと、とてもとても間に合わないので、せめてじゃあ1回やってみようとか、その使う中で有機栽培のもの増やしていけるかどうかというのは、これから色々考えていきたいと思っています。ぜひその辺も本当に消費者の視点というのは大事なところなので、皆さんからの意見も聞きながらですね、進めていきたいなと思っています。ありがとうございました。

司会)

ありがとうございました。次の方、よろしくお願いいたします。

参加者2) **農地開発の方針について・オーガニックの推進に係る懸念について**

二点ほど、市長に対してになると思いますけど、お聞きしたいと思います。一点はですね、前橋市は、農地を今後守っていくのかどうかというお話です。

私、測量会社をやっているもので、30年くらい、農家の人と色々お話をしているんですけども、15年ぐらい前ですかね？高崎市さんは農転の開発許可で、太陽光発電を認めなかったんですね、農業委員会が。前橋市さんも条例作ってるんですけど、あの条例って、ダメという条例じゃなく、やる時にはこういうことやってくださいね、というだけなので、逆に開発の免罪符みたいになっちゃってるところがあるんです。なので、同じ法律の枠の中でも、運用方針によって、規制する方に傾くのか、推進する方に行くのか、農地が減る方に行くのか、守る方に行くのかが大きく変わってくると思うので、前橋市さんの方針みたいなところをお聞かせ願えればというのが一点。

もう一つは先ほど有機の話、オーガニックの話が出てて、先日、千葉大の先生がいろんな論文をまとめた中で、オーガニックの例えば健康に対する具体的なものは、論文の中では発見されてないみたいなのところもあって、学校にオーガニックを入れる時に心配されてたのが、それをネタに今度は詐欺行為みたいな、「学校でこうやってるから健康にいいですよ、オーガニック食品は。」みたいな話になってきちゃうのも困るよねと。私はどちらかというとオーガニックを推進しようとしてる方なんですけども、オーガニックにそういう変な考え、レッ

テルが貼られちゃうのも困るので、その辺も含めて導入、オーガニックを進めていく上では、科学的な根拠というのは重要になってくると思います。その辺についての考えもお聞かせ願えればと思います。

市長)

ありがとうございます。さっきの給食の話は、今回前橋で初めて有機野菜の日というのをやったんですけど、それはあくまでも有機栽培という農業がありますよ、それに取り組んでる前橋の農家さんもいますよということで、科学的なものを使わない、環境にいい栽培方法で作られた野菜ですよ。ということで、子供たちには紹介をさせていただきました。なので、それが健康にいいとか、科学的な根拠だということではなくて、あくまでも前橋の農業の紹介ということで進めているので、そういった形で進めていきたいと思いますし、今後ですね、例えば本当に、じゃあ有機のものを食べて、健康にいいかどうかみたいな、そういった研究だとか科学的なものが進んでくるかどうかというところを見ながら、健康についてというのはまたやっていくのかなと思うんですけど、現状では前橋市内の農業の多様性の紹介というところでやっています。

で、一点目の農地を守るのかどうかというところなんですけれども、皆さんの意見を、せっかくなので登壇者の方々からもお聞きしたいと思うんですけど、矢端さんお願いできますか？

矢端さん)

農業者が減るというのと合わせて、今耕作放棄地という言葉の方がまたわかりがいいかなと思いますけど、先ほどの僕の話をしたら戦後がどうのこうのと言う中で、食管がなくなるまでの昭和 50 年ぐらいまでの間は、みんな腹いっぱいご飯を食べられなかった時代なんでそのところをまずちょっと思い浮かべて、その時に生きてきた人いっぱいいるんでわかると思いますけども、腹いっぱい食べたいというのは全員のことで、国はそれを一生懸命やったわけですよ。田んぼにするのは違うなというようなところまで田んぼにしていたわけです。だけど、高度経済成長があり、経済的にこんなところまで米を作る必要ないんじゃないかというような所がどんどんどんどん耕作放棄地になったり、後継者がいなかったりという

のがあるんですけど、そういうところでどこまでその農地と言うのかなというのも一つ、みんなで考えなくてはならないことかなと思ってます。

市長)

矢端さんがやっている所とか、清里地区とか、東の方も、農地がいっぱいある地域で皆さん農業やられてるんだと思うんですけど、だんだんそこが例えば住宅が建ってきてしまったりだとか、そういう太陽光みたいなのが出てきてしまうと、続けるのもしづらくなってくるみたいな、そういう現状はあったりするんですか？

小淵さん)

そうですね、清里地区で言いますと、住人が増えてほしいという想いもありますが、やはり我々、農業をやっている立場からしますと、農地が確保されているという事が、これから先必要かなと感じます。

須藤さん)

自分は、太陽光を畑でやるというのは、それはどうかなと思ひまして、だったら餌を作っ
てうちの飼料にして、みたいな形でうちの牧場では屋根に太陽光を付けて100vで発電して、
今動力の工事もやってますので、できれば住宅の屋根だったり、牧場だったり、工場の屋根
に太陽光を載せて、農地は守って、できれば田んぼのインフラだったりそういうものは守っ
ていって、前橋の田園風景を守っていくみたいな形で田んぼ農家さんと畜産農家さんでずっ
と話し合っていて、まず堆肥を使って、そこで何かを作っている、これは人間のための野菜
だったり、これも当然ですけども、家畜としての豚だったり鶏だったりの餌にして、それで
循環をしていくみたいな形で、農家を守っていった方がいいかなと自分でも思ってます。

市長)

ありがとうございます。農地が今あるところも、先ほど出てるみたいに、後継者がいないとやっぱり土地を持ってる方は売ってしまいたいという風に思う方もいるかもしれないし、非常に農地をこれからどうするかというのは大事なテーマだと思っています。

農地だけではなくて、やっぱり土地利用のあり方、前橋全体を見た時に、ここはしっかり農業が続けられる地域として、ある程度の農地を守っていこうとか、あるいはこの辺は発展する地域だから、開発ができる工業地帯にしていこうとか。一番私が思ってるのは住宅が郊外にどんどん広がっていってしまうと、どっちもやりにくい、農業もやりにくいし、工業もやりにくいし、郊外が使いにくくなってしまって、そこに家がいっぱい建ってきてしまうとインフラの整備だとか、将来的な公共交通だとかというのも非常に大変になってきてしまうので、いずれにしてもちょっと市全体の土地利用のあり方というのは、しっかりある程度線を引いていく必要があるのかなと思っています。

ただ、その場合には当然農地を持ってる方々に対しても、今までは農転をして家を建てられたけど、ちょっとここにはもう家建てないでねというようなお願いをしていかなきゃいけないかもしれないので、その辺は丁寧に市民の皆さんとも話をしながら、これからの前橋の農地を始めとした、全体の市の発展の仕方というのは考えていきたいなと思っています。ありがとうございました。

司会)

ありがとうございました。次の方よろしく願いいたします。

参加者 3) **スマート農業について**

私頃、学校でスマート農業について学んでおりまして、こういう新しい技術、どんどん使っていけるようになったら便利になると思っています。そこで質問なんですけども、前橋市において、今後スマート農業の実証実験や新しい技術を学ぶ上での、モデルとなるような農場の設置などは検討されていますか？

市長)

ありがとうございます。農業が学んでいる学生の方々が参加してもらってるんですね。どうもありがとうございます。スマート農業に関して今お話があったように、例えば前橋市でどこか土地を用意して、そこでいろんな研究をしてるというような取り組みは今はないんですけれども、市としては農家の皆さんがスマート農業に取り組みたい・チャレンジをしたいという方に対して、そういう機器の購入費の補助とかをやっているんです。

実際に、さっきから皆さんにお話ししてもらってるように、前橋は農家の皆さんが自分たちでどんどん新しいことにチャレンジをしていくというすごい農家さんが多いので、須藤さんもスマート農業、最初の頃から取り組んでいますし、他にも結構、自分のところで実証実験の場みたいな感じでやってる方が結構いらっしゃいますよね。そういうところを注目していただくと、学生と組んで新しいスマート農業の研究だとか実証実験というのが進んでいくのかなというのは期待しているところになります。なんかやってみたいこととかありますか？ スマート農業、こういうことチャレンジしたいなとか。

小淵さん)

うちの法人ではお米の栽培に関してなんですけど、合鴨ロボットと言ってですね、太陽光で田んぼの中をぐるぐると自動で動き回る機器を前橋市さんから補助金を頂いて、導入して動かしております。おかげで除草剤を使用することなく、田んぼを作るとかそういったことに貢献できています。

そういったことが我々で言うと、障がいのある方たちの働きの中で、彼らの労力を軽減することになっていたりするので、非常に助かっています。ぜひ、何かいい機械を開発していただければと思います。

参加者3)

この先、勉強していく上で開発・考えていこうと思っております。ありがとうございます。

司会)

ありがとうございました。次の方よろしく願いいたします。

参加者 4) 前橋の市民農園の取り組みについて

私は元々父が酪農やってて、その後継者なんですけども、ダーチャというロシアの制度がありまして、それがどういうことかという、都市にいる国民が、農地を国から一定の面積を譲り受けて、そこで週末とかに自分で家を作ったり、農産物、果物などを作ったりということで自給自足をしていて、なんとじゃがいもは95%の自給率だそうです。それからドイツにしてもスイスにしても、似たようなことをやってると、それで日本はどうかと思いましたら、市民農園という法体系があって、それがどんな感じで広がってるか調べましたら、おおよそ5000件ぐらいあって、その点において前橋は、私が見たところ、富田町でね、直売所の隣でやってると話を聞きまして、そういった取り組みは市長としてどういう風にお考えでしょうか？

市長)

はい、ありがとうございます。前橋の市民農園もいつもね、応募出すとすぐいっぱいになってしまうぐらい、人気な取り組みになっています。やっぱり農業のことって、農家さんにどうしても今任せちゃってるところが多いんですけども、なるべく自分たち、市民の方が農業に携わる機会がもっと身近に増えたら良いんじゃないかなというのを思っていて、その辺で先ほどもね、かいつまんでお話したんですけど、農業ボランティアっていう、市民が農業の体験ができたとか、農家のお手伝いができるような仕組みを今後研究していきたいなっていう風に思っています。

先ほど言っていたいただいたみたいに、他の自治体では、小さい町とか村とかでは一坪運動じゃないけど自分の家で、自分が食べる野菜は庭で作って、それを食べてもらって健康になるというような取り組みをやってるところもあったり、あるいは、学校と地域の農家がもっと

連携をして、子供たちの農業体験をやっているようなところもあるので、そういう意味では本当に幅広く、地域と市民と農家がつながるような仕組みというのは増やしていきたいなと思っています。

ちなみに、最近畑行って農業やったよという方、どのくらい皆さん携わっているんですか？ありがとうございます。で、その中で農家じゃない方どのくらいいますか？あ、じゃあプロの方がたくさんいるんですね。はい、そういうみんなが農業に携われるような機会を増やしていきたいと思っています。

ただ、場所の問題というのが結構大きくて、農地が周りにある地域はできるんですけど、街中の周辺だとそういう機会というのは減ってきてしまうので、じゃあプランターで栽培ができる方法ないかなとか、会社の屋上をそういった畑にしてもらって、企業も農業に取り組めないかな、とか、そういうこともこれから面白いアイデアはやっていきたいなと思っています。どうもありがとうございます。

司会)

ありがとうございました。次の方よろしく願いいたします。

参加者 5) 耕作放棄地の対策、支援について

先ほど耕作放棄地の話が出たんですけども、実は私のところも耕作放棄地です。場所が、ゆずりは会さんが主に活動してる清里地区、両隣がゆずりはさんで、理事さんのとこまで話がいってるかどうかわかりませんが、現場の方からはこの農地を貸してくれという話をされております。ちょっと具体的な話で申し訳ありません。で、不満点があります。耕作放棄地ですので、農地再生しなきゃいけない、ほぼ 500 坪のうち 100 坪以上は雑木が繁茂してました。実は去年 10 月に農業委員会の方から、お宅の雑木が繁茂して農道まではみ出してるんで木を切ってくださいという話をされましたので、農道の通行に支障がでる部分の全ての木を伐採、個人でしました。1 ヶ月かかってます。

それは農地の東側の部分なんですけども、実は北側に農道がありまして、その農道に雑木が生えてきたのが最初のことで、ほぼ 7～8 年前のことですので、前の市長さんのことだと思うんですけども、当時の道路管理課に話をしたんですが、切ってもらえませんでした。ちょっといい加減だなという感じで放っておいたところ、うちの畑の中にも進出して、北側の農道だけではなくて、東側の農道まで侵食してきたという経緯があります。一応、市の方に改めて連絡して、うちの農地の木は切ったので、農道部分は市の管理ですから、切ってください。と話をして、先日切っていただきました。

問題が、伐採した木がそのままになってますので、その耕作放棄地の農業再生というので、行政の支援もありますという話が先程出ましたが、できる限り行政でも、支援をしていただければありがたいなと思います。

市長)

ありがとうございます。耕作放棄地はいろんなところで増えていて、そして時間が経てば経つほど、今仰ったように木が生えてきてしまったりだとか、畑に戻すのも大変になってくるので、スムーズに誰か借りてくれる人がいるとありがたいなと思ってます。

農道の雑木についても、早めにご連絡いただいた時には、早めに対応ができるように、今後もしっかり取り組んでいきたいなと思います。使える制度かどうかっていうのを、また改めて担当の方から確認をさせてもらいたいと思いますので、引き続きよろしくお願いいたします。どうもありがとうございました。

司会)

ありがとうございました。次の方、よろしくお願いいたします。

参加者 6) 須藤牧場の自然分娩について

須藤さんに質問です。自然分娩の話をしていらっしゃったが、監視カメラで観察してると言っていたんですけど、その分娩の際は実際に職員の方が見に行ったりとかはしないんですか？

須藤さん)

はい、ありがとうございます。(結論から言うと) 見ております。一次破水、二次破水が起きてから正常分娩だと、前足から出て、前足から頭にかけて出てくるのをご存知だと思うんですけど、その状態かどうかを一次破水か二次破水の状態の時に、もうスタッフがいて、手を入れて正常分娩だなというのを確認するというのは基本的に日中だったり、気がつけばアパートに居ても飛んできて、手を入れて、そこからはもう介助しないという形の自然分娩です。ですから、基本的にはストレスがなかったり、健康であればもう何も触らなくてもいい状態なんだけど、これが後ろ足だった場合に、へその緒が1回切れて、その状態だと肺呼吸に変わる時に、まだ子宮内に頭が残っていると窒息死という形になってしまうのを防ぐために、基本的には人が介しています。

でも、それももう半年以上一回もないので、50頭ぐらいいるんですけどそれも一回もないので、今のところはストレスフリーでホテルが成り立っているのかなと思います。ありがとうございます。

市長)

ありがとうございました。脱線してしまうんですが、須藤さんの説明の中でモッツァレラチーズの紹介があったと思います。赤い梅ジェンヌのモッツァレラのお話ありましたが、赤城フーズさんが作ってるカリカリ梅、元祖カリカリ梅も、みんなが知ってるカリカリ梅も前橋が元祖なんだよ、というのも結構知られてないので、カリカリ梅も皆さんで推して行けたらなと思います。

司会)

ありがとうございます。次の方よろしく願いいたします。

参加者 7) 学校の農業体験について

今日は貴重なお話ありがとうございました。皆さんの話と、こちらに学生さんがいっぱいいらっしゃるんでちょっと聞きたいんですが、小学校から中学校の間に田植えから刈り取りの経験を学校でされた方、手を挙げていただいてよろしいでしょうか？

市長)

あ、結構少ないですね。

参加者 7)

ということを最近気がついたんですよ。農業の基本の基は日本は米だと思うので、その体験をもっともっとやってほしいなということを感じてます。で、先ほどの小規模農業の話もあったと思うんですけど、都会の方とかを引き込んで、体験農業を取り入れて都市間との連携とか、東京の全然農機なんか見たこともないような子たちも引き込んでですね、連携していただければと思います。

前橋市はめぶく Pay を始めたと思うんですけど、例えば農業お手伝いクーポンみたいなものを出してですね、手伝ってくれた人にあげる、それを前橋のショップなり、前橋市に来た時に使えるという感じでですね、ちょっと体験してもらわないかと思ひまして。他にも出口とか、お料理でもですね、学校の家庭科の授業でレシピコンクールをやってもらおうとか、学校を繋いでそのようなことをやっていただけると面白いのかなと思いました。以上です。

市長)

ありがとうございます。素敵な提案をたくさんもらいました。それぞれの学校の中でそういう田植えとか稲刈りとか、畑をやる機会というのは今実際作れてないと思うんですけども、ただ、民間の方で田植え体験とか稲刈り体験というのをやって、募集すると結構子供たちもたくさん集まったりするので、そういうところで子供たちは今すごくニーズがあるので、それがどんどん広がっていくと本当にいいなと思います。

小淵さん)

清里小学校の5年生が毎年、田植えと稲刈りをしていて、そのお米をお届けすると、家庭科の授業で食べられるといったところで、実はその前にも、地元の公立の保育所、清里保育所の皆さんともやっていてですね、保育所を卒業した子が、5年生になってまた来てるといった感じになります。

市長)

できる地域はどんどん地域の農家の方とか事業者とつなげていくというのもありますし、多分元総社中学校か何かは学校で畑をやっていて、玉ねぎとか学生が作って、たまに売りに来たりとかしますよね。そういう学校でできる環境があるところは学校でも増やしていけるといいなと思います。東京から呼んで、お手伝いクーポンというのはいいい仕組みかなと思うので、研究してみたいと思います。どうもありがとうございました。

司会)

ありがとうございました。次の方よろしく願いいたします。

参加者8) 前橋の酪農家を応援するには

東地区では結構北部の方の田畑がだいぶ住宅地になってきています。で、質問は須藤さんに一点と、村上さんに一点なんですけれども、まず須藤さんには普段スーパーで乳製品を買

おうとすると、食品表示のところに脱脂粉乳、外国産というものがちょっと増えてきてるなと思っています。こういった地元の酪農家の方の商品に貢献するには生乳以外でこういったものを手に取るようにした方がいいのか教えてください。

地域おこし協力隊への市民の協力は

村上さんにも一点あるんですけども、地域おこし協力隊の関係で秋間梅林で梅の実をもらったり、枝切りをしたような時期が私あるんですけども、やはり地域おこし協力隊の方はいろいろ苦勞している様子がありまして、村上さんもそういった活動で先頭を走っていくのに、賛同者が少ないというのは心細い時もあるかと思います。村上さんの活動のなかで、我々一般市民が協力できることでなんかお願いしたいことはありませんか？教えてください。

須藤さん)

脱脂粉乳についてなんですけども、最近ニュースの方で脱脂粉乳が余ってるとか、牛乳が余ってる状態、これは学校がコロナによってお休みになった期間がありまして、どうしても牛乳というのは生ですので、そこで粉にして取っておこうというので、牛乳はバターを作る時に生クリームを取り出すと脱脂乳というものができて、それを粉にして取っておくというのが国の施策であります。でも外国からも輸入される量があって、それが今回、脱脂粉乳が国産でだいぶ余ってしまったんで、それで少なくして、国産で何とか補いましょうとなったんですけど、国産の脱脂粉乳は質がすごい良くてですね、今度は質が良すぎてメーカーから使えないってことで、なかなか置き換えられなかったんですね。

なので、外国産のやつを仕方なく使ってたんですけど、メーカーさんはやっぱり牛乳が余ってきてるので、そこはやっぱり国産にしましょう、というのでだんだんスキムミルクという形で、まあ同じものなんですけど、それを使ってじゃあパンを作ってくださいだったり、ヨーグルトに脱脂粉乳を使ったものは脱脂粉乳、生乳を使ったものは生乳と書いてあるので、ヨーグルトとして脱脂粉乳使ってるんだなというのを見たり、あとはコーヒーマグの缶コーヒを見ると後ろに脱脂粉乳だったりが入ってますので、本当は酪農家を守りたいだったり、そう考えていただくのなら、牛乳を一日 200ml とか一日 1 杯飲んでもらえるという、それが一番酪農家の手取りになります。ただ、加工乳の方になっちゃうんですね、脱脂粉乳となると。

そうするとやっぱり手取りが減ってしまうという形になるんですけど、ひとつ言うとなると、毎日、脱脂粉乳だろうと、牛乳だろうと、乳製品、チーズなどを取っていただくということが酪農家を守るということになります。

商品表示を見て、脱脂粉乳かな、これは違うかなというのは、牛乳パックの上に切り欠きと言って、目の見えない人でも触ると分かる凹みがあるんで、それは正真正銘の牛乳という形で、それがないと加工乳になって、牛乳から脂肪を加えて脂肪分を増やしたりカルシウムを増やしたり、または脂肪分抜いて、低脂肪の牛乳だったり、それはもう加工されてますよという加工乳なので、できれば切り欠きがついた本当の牛乳といのを飲んでいただけると酪農家は非常に助かります。何にせよ乳製品を手にとっていただくことが酪農家を守るということになりますので、いい質問ありがとうございます。

村上さん)

ご質問ありがとうございます。地域おこし協力隊って何やってるんですか？とか、何なんですか？というのをよく聞かれるんですけども、前橋にも今6人くらいいるんですけども、やってることはみんなそれぞれ自分の得意なことをそれぞれ選んでから志望してそれでやっているんですけども、私の場合は食べることとか、料理というのが軸になってるので、「あ、なんか食べることやってる人なんだな」という風に理解をしてもらいやすいかなとは思って、それはありがたいなと思ってるんですけども、地域おこし協力隊って、例えば前橋市だったら、前橋市を例えば住みやすくするとか魅力を改めて伝えとか、そういったことに対して日々一生懸命活動をしている人たちになります。

今のところ、あんまりその各隊員が何をやってるかというのを、普段前橋に住んでる人が知る術というのがなかなか少ないかなと思うので、そういったことに対して、あの情報の開示ということを私たちの方も発信、ちゃんとやっていかないといけないという風に思っています。普段前橋で暮らしている人がもうちょっとこういうところを、例えば周りに発信してほしい、伝えてほしいとか、あとは私にだったら、こういう美味しい食材がありますよ、とかそういったことを教えてくださったりとか、そこに住んでる生の声というのが聞ける機会みたいなのがあったら嬉しいかなと思います。

市長)

ありがとうございます。今日、皆さん、村上さんの顔と名前覚えてもらったと思うので、もしそれぞれの地域で新しいメニューを作りたいとか、地元の野菜を使って地域盛り上げたいという相談があれば多分乗ってくれると思うので、ぜひそれぞれお声掛けいただけるのも応援になると思います。 良い質問ありがとうございました。

司会)

ありがとうございました。次の方よろしく願いいたします。

参加者 9) 県外から来る子どもへ向けての前橋産野菜の PR について

よろしくお願いします。私は赤城の南面の方で色々な子ども達の体験活動を支援しているんですけども、体験活動の中には前橋産の食材を使ったりするカレー作りとか色々やっている訳なんですけれども、その中で県外から来る子たち、埼玉とか、茨城、千葉とかから来るんですけども、そういう子たちにも前橋の野菜はすごく美味しい野菜なんだよ、と伝えたい思いがいつもありまして、実際にその野菜ができてるところとか、体験とまではいなくても、そういったことを PR 出来るといいのかなと思うんですけども、PR とかは何かされてらっしゃるのでしょうか？

市長)

ありがとうございます。結構農家の皆さんも協力してくれる方が多いので、例えばそういうモニターツアーだとか、外から来てる子供たちに何か体験させてもらいたいという話があると積極的に受け入れをしてくれる農家さんが多いと思います。富士見地区もおそらく、富士見は伝次平クラブという目黒区の子供たちが毎年バスで来て、野菜の収穫とか種まきとかしたりしているグループもあるので、富士見地区でも地域の皆さんと繋いでいけるとそういった体験はしやすくなってくるので、ちょっと今後、繋ぐのでは是非地元の農家さんと一緒に盛り上げていただけるとありがたいなと思います。 よろしくをお願いします。

司会)

ありがとうございました。次の方よろしく願いいたします。

参加者 10) ゆずりは会が成果を出せている理由は

私は定年を過ぎて、農家をやってます。それで今回、前橋の農業ということなんで、農業をやってる一員として、現状と、あと小淵さんに質問がありまして。私はもう定年で、年金もらって、私と妻とパートさんでやっていて、それでも中々お金が残らない。こんだけやってるんだから残っていい訳だろと思うんですよ、でも残らないんですよ農業って、魅力がないんですよ。

先ほど言った組合長さんみたいに、大きく機械を揃えてやったり、酪農家さん、ちゃんとした計画でやってる人というのは多分経営がしっかりしてるんだと思います。ただ普通の、その他の一般の農業者って、本当に朝から晩まで仕事して、それでやっと、貯金が残るか残らないかが現状だと思うんです。だから、今年は米が高かったり、野菜が高かったりだから、そういうものが今の水準で米が高く売れたり、野菜が高く売れたりすれば、農業に若い人が入ると私は思うんです。

それと、それに伴って小淵さんに対して、今の現状として、施設で 40 人くらいの方が収入を得てる、それもその 1 番か 2 番だという話なんですよ。だから農業でも会社でもそうなんだけど、問題はいかに稼げるかどうかということなんだと思うんです。そういうことなので、小淵さんにどうしてそういう風にお金を稼げたかとか、給料をどういう風にしてみんなに分けて 1 番 2 番にしてるといふのを聞きたいと思います。

小淵さん)

ゆっくり話すと 1 時間はかかってしまいますので、かいつまんでお話しすると、我々の制度の

中でまず知っていただかなければいけないのが、障がいのある方たちが我々の事務所に働きに来ていますが、最低賃金をお支払いしているわけではございません。訓練という扱いの中で、我々の活動の中で稼いだお金の手残りとなる利益を皆さんに配分している、そのお金が群馬県で一番という金額になっていたというところなんですけど、実は農業以外の仕事をやっていた時もあるんですが、農業にフォーカスするようになってきてですね、選択と集中ができてきたのもあるんですけど、みんなの活躍の場を作れるようになったんですね。

何年か前までは、我々職員側がとにかくがむしやらになって、工賃という賃金を上げようとかむしやらにやっていた時代があるんですけど、結局上がらなかったんです。で、結果今の状況にどうしてなれたかというところ、やっぱり1人1人の、特に障がいがある皆さんの個性あるその能力を引き上げて、その仕事ができる場面を作り出していくかというところがすごく大事になったんですね。例えば私も得意なものと不得意なことが当然あってですね。不得意なことを毎日やらされていても、多分能力の発揮にはならないでしょうし、ストレスになることもあると思うんですが、我々の方針の中では農業を通じて、如何にみんなの活躍の場を広げていって、地域の中で役割を果たしていくかということに注目しているというところが大きかったものだと思います。

市長)

障がいのある方の工賃って群馬県の計画だと2万円を目指してるんですけど、なかなか2万円にいかないんです。1万8000円ぐらいかな、それでも全国的には群馬頑張ってるって言われてるんですけど、小淵さんのところはその3倍とか4倍ぐらいの、7万円ですよ。なので、まあ障がい施設、作業所の方々いろんな作業をしてるんですけど、今後はもしかすると農業というのが、そういう事業所の皆さんにとっても工賃を上げる切り札になるんじゃないかなというのは、やっぱりみんなが注目して、これから農福というのはさらに盛り上がっていくんじゃないかなという風に思っています。

最初の、儲かる農業ってやっぱりこれ大事ですよ。で、うちは実家が父がお米作ってて米農家なんですけど、お米の値段も自分たちで決められないし、毎年変わってくるし、生産にかかる費用はどんどん上がってるというので、どうしたらいいんだって考えて、うちの父親は、この2〜3年、もうちょっと前かな、農家をどうしようじゃなくて働いてる人たち、サラリーマンの給料上げること一生懸命なんです。

皆さんの賃金が、世の中の賃金が上がってくれば、そういう物を買う、消費に対する物価も上がってくるだろうというので、やっぱそこが上がらないと、どうしても野菜とか食べ物については価格が上がってこないから、やっぱり全部が繋がってることなんじゃないかなと、やっぱ皆さんがお金を使えるような世の中に変えていくことが、農家の所得が上がるということが1つのキーワードにもなるのかなと思ってます。もう本当に農業も大事、経済も大事、皆さんの暮らしも大事ということでみんなでいい繋がりのある社会を作っていけたらなと思っています。

司会)

ありがとうございます。最後に市長から一言よろしくお願いします。

市長)

もうまとめちゃったんですけど、本当に幅広いテーマで農業もお話できて、これもですね、今後色々な場所で農業について皆さんと話ができたらなと思っています。いずれにしても、前橋の大事な産業の1つが農業であるということと、前橋の魅力をPRする上でもこの食っていくのは非常に大きなキーワードになってくるので、これから皆で前橋は美味しいものがたくさんあるんだと、食べて健康になっていい暮らしができる街だよというのを広めていけるように頑張っ参りますので、引き続き皆さんのご支援をよろしくお願いいたします。今日はありがとうございました。

司会)

以上をもちまして、令和6年度第5回タウンミーティングを終了させていただきます。本日は誠にありがとうございました。

以 上

